



5月から東京藝術大学出身の若手芸術家3人が市内に滞在し、自然や地域との交流からインスピレーションを得て制作活動を行いました。10月12日の展示会で開かれたギャラリートークから3人の思いをまとめました。
問文化課 TEL 71-2463



SHOGO NUNOSHITA
布下 翔基さん

土から感じた文化や人の暮らしを
作品に映し出す

土は人の思いを「継ぐ」もの

焼き物と漆を素材として「継ぐ」をテーマに制作に取り組みました。漆には、金継ぎなどの物と物を「継ぐ」というイメージがありますが、記憶を継いだり、人と人とをつないだりといった「継ぐ」力も持っている日々感じています。もし、人が土から生まれて土に返るのならば、その中に人の思いや記憶、そこに暮らした人の営みなどが残り続けていて、そこからまた新しく人が生まれて…と、土は思いと共に循環し受け継がれているものだと思っています。

これをテーマに安曇野の皆さんの思いをリサーチしながらいくつかのプロジェクトを行いました。1つは「大地の郵便局」です。安曇野の土で作ったポストに皆さんの思いを書いた手紙を投函し、安曇野高橋節郎記念美術館の庭に埋め、その上に植樹をして思いを残

すというものです。それと同時に、小学生と多くの時間を過ごしました。焼き物で子どもは親を、親は子どもの「今」を作るワークショップ。また、種がすき込まれている紙に自分の未来や未来の友人に宛てた手紙を書いて埋め、思いで育っていくというプロジェクトも。安曇野の子どもたちは、すごくアートに心が通わせられていると実感しました。

安曇野の歴史と興味を形に

滞在期間中は、私の作品が安曇野の人たちが知らないものを知るきっかけになって、その興味から「安曇野ってこういう場所だったのかもしれない」と感じてもらいたいという思いがありました。

リサーチの中で、同じ土から作られている瓦に興味を持ちました。そこで、かつて瓦を作っていた場所を訪れ、そこでいただいた瓦にその頃の写真を陶芸の転写紙の技法と漆で貼り、焼き付けをしたものを関係する本と一緒に展示しました。

滞在中、多くの場所を訪れましたが、安曇野の人は、アートが目の前に出てきても向かってきてくれる。そこから感じた人の温かさがとても記憶に残っています。

大地の郵便局ポストを制作(左) 7月から11月まで安曇野高橋節郎記念美術館に設置され、多くの思いが投函されました。歴史を焼き付けた瓦(右) かつて豊科田沢地区で作られた瓦に作っていたころの写真を焼き付けて展示。



KONOMI KOBAYASHI
小林 このみさん

安曇野で感じた新鮮な気持ちを
漆の色を使って表現する

色を使って漆と安曇野の風景を重ねる

漆の魅力を使って安曇野で感じ取った魅力を発信できたらと思いながら制作しました。私が初めて安曇野に来たのは、ゴールデンウィーク頃でした。自転車で市内を走っていた時に、水が張られた田んぼに空の青がきれいに写り、青がどこまでも広がっていくような感覚に陥りました。安曇野で感じた日差しや風の心地よさは、今までの自分にはない経験。作品には、その足を止めて空を見た新鮮な気持ちを表現しました。いつも作る時には、漆の魅力をどうしたら伝えられるかということを考えています。黒ラメとか赤でキラキラしているイメージが強い漆ですが、青やピンクも使えるってことを伝えたいと思い制作を行いました。



ゆうゆう回遊(左) シェアハウスで出会った人たちをクジラをモチーフに表現。ワークショップで作成した皿(右)

同じ風景でもいつも違う感じ方ができる

8月には約2週間シェアハウスに滞在しました。そのキッチンから見える田園風景が毎日、気分や時間帯によって受け取り方が全然違って、特に気持ちが踊っている時に見た朝焼けに輝く田んぼが印象的でした。そこでいろいろな人と話していると、これまで美術に囲まれて暮らしてきた私の中でありきたりな環境以外にも多様な生き方があって面白いと感じました。また、市民の皆さんと一緒に皿に絵と蒔絵を描くワークショップも行い、漆に色が使えるということ伝えると同時に、安曇野の魅力を共有する場になりました。私が感じていた「毎日見ている飽きないし、見る時によって変わる」ということを皆さんと共有できて風景を題材に選んでよかったです。5月や8月以外にも安曇野の季節の移り変わりを感じにまた安曇野を訪れたいです。



MINAMI WAKATSUKI
若月 美南さん

滞在中の出会いや体験を
形というストーリーに

出会いの点と点をつなげて形に

安曇野でいろいろな人に出会い、そこで教えてもらったストーリーなどが自分の中で点と点が1つつ重なっていくようなイメージを持ちました。そのイメージをインスタレーションとして表現したいと思い安曇野で出会ったものを使い作品を制作しました。インスタレーション空間にはいろいろな素材や物事の蓄積をちりばめ、また、滞在中に体験した1つ1つの点の記憶の集積が1つのルーツとなり、1つの集合体になることで、鑑賞する人が多様な視点で作品の意味を感じられる「それぞれのルーツ」という意味も込めています。素材はリサーチ中に出会った皆さんからももらったものを使用しました。

感じた感覚をそれぞれの見え方で感じてほしい

リンゴの木を燃やして循環に帰すということテーマにした作品「テン」では、キツツキが開けた穴や虫が開けた穴もあったり、私が直接開けた穴もあったりするのですが、これも見る人に見え方を委ねています。さらに、天蚕センターで感じた緊張感のある技術。その穏やかさと緊張感と神秘的な感覚がとても不思議に感じました。それを皆さんと共有できないかと思い「セン」という作品にしました。

安曇野の皆さんは誰もがこだわりを持って仕事や物事をしていて、作り手として話を聞くと深いストーリーにたくさん出会えました。この出会いは素晴らしいことだと思っていて、とても感謝しています。

※インスタレーション: 空間全体を作品として体験させる作品



テン(左) 滞在中に訪問したリンゴ農家は、折れやすく扱いにくい樹齢60年のリンゴの木も愛着をもって育てている。そんな気持ちや体験を形にした作品。セン(右) 映像を布に映し、織り手とその時間の糸が交差する形を表現した作品。